氏　　名	武田　清香　（タケダ　サヤカ）
本　　籍	神奈川県
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 の 番 号	博甲第 114 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	看護師のポジティブな心理的機能を高めるストレスマネジメントコーチングに関する研究
論 文 審 査 委 員	（主査）桜 美 林 大 学 教 授　石 川　利 江
	（副査）桜 美 林 大 学 教 授　山 口　創
	桜 美 林 大 学 教 授　松田チャップマン与理子
	東 都 大 学 教 授　太 田　勝 正

論 文 審 査 報 告 書

論　文　目　次

第I部　本研究の背景 1

序　章　本研究の背景 1

第１章　本研究の目的と意義・新規性・構造 4

第１節　本研究の目的と意義 4

第２節　本研究の新規性 5

第３節　本研究の構造 6

第４節　用語の定義 8

第II部　文献研究 11

第２章　本研究の目的・意義 11

第３章　【研究 1】看護師のストレスマネジメント介入研究の動向と課題 12

第１節　目的 12

第２節　方法 14

第３節　結果 16

第４節　考察 31

第５節　【研究 1】の総括 38

第４章　【研究 2】看護師の PROACTIVE COPING 研究の動向と課題 39

第１節　目的 39

第２節　方法 41

第３節　結果 42

第４節　考察 52

第５節　【研究 2】の総括 56

第５章　【研究 3】看護師のコーチング研究に関する動向と課題 58

第１節　目的 58

第２節　方法 60

第３節　結果 61

第４節　考察 74

第５節　【研究 3】の総括 79

第III部　実証研究 81

第６章　本研究の目的・意義 81

第７章　【研究 4】看護師の PROACTIVE COPING を高める要因に関する研究.....82
第１節　目的.....82
第２節　方法.....82
第３節　結果.....88
第４節　考察.....98
第５節　結語.....107

第８章　【研究 5】看護師の PROACTIVE COPING とストレスコーピング能力に関する因果関係―交差遅延効果モデルの分析―.....108
第１節　緒言.....110
第２節　方法.....112
第３節　結果.....118
第４節　考察.....125
第５節　結語.....131

第９章　【研究 6】看護師のストレスマネジメントのための PROACTIVE COPING に基づいたコーチング支援.....132
第１節　緒言.....132
第２節　方法.....135
第３節　結果.....140
第４節　考察.....149
第５節　結語.....155
第６節　研究の限界と課題.....156

第IV部　結語.....157

第１０章　本研究の総合考察.....157
第１節　文献研究の検討.....157
第２節　実証研究－仮説の検証.....160

第３節　実証研究ー介入研究の検討.....162

第１１章　本研究の限界と今後の課題.....167

第１２章　本研究の意義と新規性.....168

第１３章　結語.....169

謝辞.....170

引用文献.....I

添付資料.....I

論　文　要　旨

本邦における医療職の精神障害補償状況は上昇傾向にあり、これまでも看護職者のストレス低減に関する研究は数多くなされてきた。本論文は、ストレスのネガティブな効果の低減ではなくポジティブな心理的機能に着目した看護師へのストレスマネジメント支援のあり方について検討をしている。本論文は 4 部に大別され、13 章の構成となっている。

第Ⅰ部の２つの章では、本論文の研究背景から研究目的として看護職のストレスマネジメント支援が急務であることが示されている。第Ⅱ部は文献検討が行われている。第３章研究１では、看護師のストレスマネジメント介入研究の動向と課題として、国内外文献 453 件の中から、①看護師のストレスに対する効果的な介入プログラムと手法 、②看護師のポジティブな心理的機能に着目した介入研究の実施状況 、③看護師のストレス介入研究で使用されている尺度に関する 20 論文を採択し検討を行った。看護師のストレスマネジメント支援における活用が容易で継続性のある介入内容が求められていることを明らかにした。第 4 章研究２では、ポジティブな心理的機能として Proactive Coping に注目し看護師などの医療従事者、患者や高齢者，家族を対象とした研究動向と課題を検討している。看護師を対象とした Proactive Coping は調査研究のみで介入研究は見いだせなかっ

た。医療従事者対象の研究から看護師においてもポジティブな心理的機能の向上にProactive Coping が有効である可能性が示された。そこで第５章研究３では、看護師のポジティブな心理的機能を高める手法としてコーチングの活用を検討するために看護師へのコーチング研究の動向と課題の文献レビューを行っている。その結果、看護師へのコーチング実施では、コーチング能力とコミュニケーシ ョン能力の向上、メンタルヘルスの改善効果、職務満足度の向上などの効果がみられることが明らかになった。

第Ⅱ部の文献研究から、看護師のストレスマネ ジメント支援において、ポジティブな心理的機能を高めるための Proactive Coping の効果が明らかにされ、GROW モデルコーチングが有用であることが示唆されたことから，第Ⅲ部では実証研究が行われた。第６章は実証研究の目的と意義を示し、第７章の研究４において、看護師の Proactive Coping を高める要因を明らかするために看護職者 14 名を対象にインタビューを行い、ストレス体験から看護師の Proactive Coping を高める要因と支援策を明らかにしている。Proactive Coping を高める要因は、「ストレス体験」から、「体験の意味づけ」を行い，出来事をポジティブかつ客観的に捉えることで、「視点と発想の転換」や「目的と目標の転換」を行うこととされた。第８章研究５では、ポジティブな心理的機能として Proactive Coping に対する信念と行動、および首尾一貫感覚（Sense of Coherence/SOC）を含めた調査研究を実施し交差遅延効果モデルを用いて因果関係の分析を行っている。その結果、日々の Proactive Coping の信念や行動といったストレスコーピングの蓄積が SOC を高め、看護師自身のセルフマネジメントにつながる可能性が示された。第９章研究６では、看護師のストレスマネジメントのための Proactive Coping のステージモデルをベースとした介入案を作成し、Proactive Coping に基づいたコーチング支援を行い、その有効性と効果を検討した。介入の結果，看護師のストレスマネジメント支援においては、Proactive Coping を高めるコーチングの介入は有効であり、看護師自身が人生の目的や目標を意味のあるものと感じ，自己の強みに気づくことができるコーチングの必要性が示唆された。

第Ⅳ部結語として第 10 章は総合考察、第 11 章研究の限界と今後の課題、第 12 章研究の意義と新奇性について論じ、第 13 章の結語としている。

一つひとつの概念を文献レビューに基づき詳細に検討し、調査研究で概念間の関連性を検討したうえで介入研究を実施している。研究の少ない看護師のストレス経験からのポジティブ心理的機能が Well-being に果たす役割について丁寧に検討された研究論文として独自性の高い研究であり、学位論文として合格と判断された。

論文審査要旨

学位請求論文提出後、主査と３名の副査による審査が行われた。本論文は看護師のメンタルヘルスの悪化を予防するだけでなく看護師のストレス経験からのポジティブ心理的機能が Well-being に果たす役割について検討した研究論文として高く評価された。その審査

過程では、文献レビューに看護師だけでなく患者など他の対象者を含めている理由やコアカテゴリーの命名の妥当性についての疑問、コーチングの対象者と実施者の区別が不明確といった指摘､用語を統一すること､繰り返しの表現が多いことなどについて指摘された。これらの指摘に対して丁寧な加筆修正が行われた結果、本論文は看護師のポジティブな心理的機能を高めるストレスマネジメントコーチングを扱った研究として意義あるものであり、学位論文としての水準に達していると認められた。本論文では、関連する先行研究について詳細な検討を重ねた後、インタビューや調査研究、さらに介入研究によって十分なデータに基づき粘り強い検討がなされている。これらのプロセスを丁寧かつ確実に実施されていることから、武田氏は十分な研究能力を有し、今後とも自立した研究を進めていくことが可能であると判断された。主査、副査全員一致して、学位論文として合格であると判定した。

口頭審査要旨

Zoom による３０分の研究報告、３０分の質疑応答が行われ､時間内に報告を終了した。看護領域に関するストレスマネジメント、Proactive coping、コーチングと膨大な研究を丁寧にレビューしている点、インタビュー内容のポジティブな観点からの分析、コーチングによる介入など複雑な研究の全体像を時間内で説明できている点について全審査者から高く評価された。質疑応答においては、以下のような点についての質疑が行われた。介入研究におけるコーチングの効果評価の方法の具体的内容について、介入方法による結果の相違の解釈について、ポジティブな心理的機能としての Proactive Coping と首尾一貫感覚の関連性についてなどの質問や意見が出された。それらの質問や意見に対して適確な回答がなされた。介入の限界についても無理のない提案として評価され、看護師のメンタルヘルス対策やキャリアアップに対する支援方法について今後さらに研究を深めてほしいとされた。

総合的に判断して、最終試問として合格であるという結果で審査者全員が一致した。